倉本聰の

地球に暮らす 自然と住まう ②

くらもと・そう／脚本家・演出家。2005年より閉鎖となった北海道富良野市内のゴルフコースを舞台に「C.C.C富良野自然塾」を開塾。ゴルフコースの自然返還活動と、環境教育プログラムを展開している。

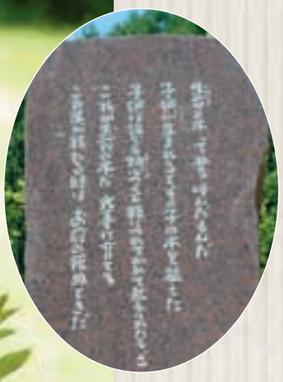
木を植えるということ

脚本家・倉本聰氏に地球と人の関わりについて話を伺う連載企画が、前号よりスタートしました。今回は、私たちが生きるために重要な酸素と水源をつくり出す「木」を植えることについて、話を伺いました。

古今東西、人が森を見る時は「幹を見て葉を見ず」でした。木材になる幹に注目してきたからですね。木材になる幹たちが生きていく上でいちばん欠かせないものは、木材ではないはずです。

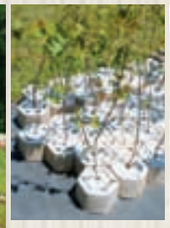
前号でも少しお話したように、葉っぱは、光合成によって人間が生きていく上で必要不可欠な酸素をつくり出してくれます。そのほか、空から落ちてくる雨水を受け止めてゆっくりと地面に落とし、地中に水を蓄えて水源林をつくる手伝いをする。落葉すれば、天然のスポンジとなって雨水を吸い込んで、地面を保湿する役割も担っていますよね。空気も水も、日頃当たり前のようにまわりにあるものだから、なかなかそのありがたみに気づけませんが。

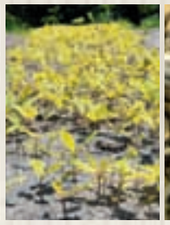
富良野自然塾でも、ゴルフコースの跡地を借りて、そこを元の森に還そうと植樹を行っていますが、その目的を「葉っぱを茂らせること」としています。ところで、1本の木にはどのくらいの量の葉っぱが茂ると思いますか？実は、先日スタッフと数えてみたんです。15m程の高さの白樺の木では、約7万5000枚ありました。例えばこれを地面に敷き詰めたとすると、200坪もの面積になります。木が1本育てば、それだけの酸素や水の元が生まれてくるわけですね。

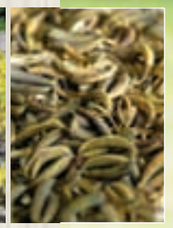


倉本氏の手がける舞台「ニングル」のセリフの一部が書かれた石板。木を人間の存在と同様に慈しむ心が伝わってくる

富良野自然塾のフィールドに植えられた苗。森の再生を目指して、毎年さまざまな人の手で苗が植えられていく







C.C.C富良野自然塾のフィールドより　右／採取した種　中右／採取した種は、植樹できる大きさになるまでフィールド内の育苗地で育てる　中左・左／苗の根を保護しながら最後は土に溶ける、優れものの紙ポット「カミネッコン」に苗を入れ、植樹する

植樹については、ほかにも大切にしている点があります。まず、土地の木を植えること。環境に合ったものを植えるということです。現在の日本は、外来種の植物がたくさん育っていますが、自然界にこれが入ってくると、在来種は駆逐されてしまう傾向があります。琵琶湖のブラックバスによる在来魚種の食害と同様ですね。加えて土地の個性もなくなる。富良野自然塾で植樹に使う苗は、在来種の種や実生苗を育てたものです。ハルニレやミズナラ、トドマツなど、多種の種を育苗地で育てています。植樹できる大きさに育てるには2～3年かかり、時間と手間はかかりますが、いちばん土地になじみます。それから、植樹する際には異なる樹種を3種組み合わせて植え付けるのもルール。こうすることでそれぞれの苗が競い合って育ち、結果として生長を促すことになるんです。

そしてもうひとつ、これらを未来につなげていくこと。森が育つには50年もの歳月が必要とされます。ゴルフコースを借りる際にも、「最低50年間は植えた木を切らないこと」を条件とさせてもらいました。もちろん、50年以上つないでいかなければいけないと思っています。

今、世界中のさまざまな場所で植樹が行われています。屋上緑化なども増えてきました。ここで大切にしたいのは「木を植える」という行為で終わらずに、植えた木の生長に思いを馳せること。

ある土地では子どもが生まれると、その胎盤と一緒に苗を植えて、子どものために木を育てるのだそうです。子どもにとっては、その木の存在は他人ごとではなくなりますよね。また、植えるための態勢をつくることも然りです。たとえば、富良野の町でも、街路樹を植えたらどうかという話があったんですが、なかには反対する人がいるんです。「落ち葉は誰が始末するんだ」って。僕は、落ち葉は集めて焼けばいいと思います。そして、その灰を利用すればいいじゃないですか。

昔、焚き火は冬の風物詩でしたよね。そして文化でもあったわけです。ただ、今は街の条例で焚き火が禁じられていたりするから、残念です。文化や自然の循環を考え直す。木を植えるということには、そんなことも必要なんだと思います。

（談）